

開発途上国と日本の幸せのために、 協力隊の可能性を広げたい

民間企業との連携など、JICAボランティアの可能性を広げる制度を次々と生み出してきた青年海外協力隊事務局。その立役者として活躍するのが、企業でのマーケティングと協力隊時代の経験を生かして働く永野りささんだ。

パナマで知った ゼロから形にする面白さ

海外で暮らす面白さや難しさを初めて体感したのは中学3年生の時。カナダでホームステイをして「もっといろいろな世界を見たい」と思いました。大学時代はタイのワークキャンプで山岳民族の生活を体験し、物が限られていても心豊かに生きる人々の姿に心を動かされました。

卒業後は、ベビー用品メーカーに就職。営業とマーケティングを担当し、商品を通じて子育てに貢献できることにとてもやりがいを感じていましたが、「国際協力の現場で働きたい」という思いがずっと心に残っていました。約3年で会社勤めはいったん区切りをつけ、より深く現地の人と関わり、同じ目線で考えることのできる国際協力に携わりたくて、たどり着いたのが青年海外協力隊でした。

派遣されたパナマでは移動図書館に配属され、地域の子どもたちに利用してもらえるようプロモーション活動をしました。最初は価値観や文化の違いから、現地スタッフとのコミュニケーションが思うようにならず戸惑うこともありましたが、物事をゼロから形にしていく活動にやりがいを感じました。

帰国後に見つけた 協力隊という、商品、を売る仕事

現地の人々の役に立てるよう、協力隊員が

全力で奮闘する姿は十人十色。それぞれに、ドラマになるようなストーリーがあります。次の進路を考えた時、前職のマーケティングの経験を生かして、自分が体験した協力隊という、商品、を世に広めていきたいと思うようになりました。そうして出会ったのが、今の仕事です。

JICAボランティアの広報を通じて、この事業の魅力をどうしたらより多くの人に伝えることができるか。手前味噌ではなく、協力隊の存在意義をもっと理解してもらえるようにしなければと強く感じました。そこで考えたのが、協力隊経験者を採用した企業や、活動を視察したことのある著名人などに意義を語ってもらうウェブ企画「サポーター宣言」です。協力隊事業を客観的に評価してもらえる仕組みとして、より多くの方から共感を得られるようになり、うれしく思っています。

また、民間企業などの社員をJICAボランティアとして派遣する「民間連携ボランティア制度」の創設にも携わりました。これは開発途上国の課題解決に貢献するだけでなく、帰国後には企業の即戦力となつて活躍できる人材を輩出する制度。企業訪問や説明会の開催などを通じて多方面に働きかけ、軌道に乗るまでは休む間もなく必死でした。一社、二社と共感していただける企業も増え、グローバル人材の育成にもつながるものと実感し始めています。



青年海外協力隊事務局
募集課

永野 りさ
NAGANO Risa

大学卒業後、メーカーに就職。退職後、2007年に青年海外協力隊員(青少年活動)としてパナマへ。帰国後、09年より現職。



協力隊時代、日本文化の紹介の一環で折り紙を取り入れたこともある

協力隊節目の年に考える 次の50年

2015年は協力隊50周年。次の50年を見据えて、協力隊の可能性をあらためて探る絶好の機会です。この記念すべき節目の年に、この仕事に携われていることを幸せに思います。

協力隊事業は、国民の皆さんの理解があつて初めて成り立つもの。海外とつながるだけが国際協力ではなく、国内の多方面の人々と連携してこそできる協力があります。これからもより多くの人にもっと協力隊の魅力が伝わるよう、その橋渡しをしていきたいと思っています。



JICAボランティアのイベントで、協力隊を目指す若者たち一人一人の相談にじっくりと乗る永野さん